目次

はじめに ―― 3

第一章 「皇軍」兵士はこうして作られる ―― 13

1 皇軍兵士となるまで ―― 14

大衆動員へ――徴兵の沿革／「皇軍」という規範意識／兵士への道／屈辱的な検査／徴集の基準／赤紙／兵役を免れるには／徴集延期の理由／在学・海外在留・生活苦／強化される引き締め／〝是正〟される不公平／身体毀損・詐病／忌避を見抜くノウハウ／「魚鱗を角膜に」「下顎部にパラフィン」

2 兵士が入隊するとき ―― 43

兵士の「個人情報」／中隊長の人心掌握術／軍隊教育のスケジュール／皇軍の理想と現実／学歴が命にかかわる

第二章 軍隊での生き方 ―― 57

1 平時の軍隊生活 ―― 58

ある上等兵の日記／「新兵器」へのあこがれ／富士山麓での演習／対抗競技で帰属意識を養う／「学科」という体罰／営外での飲酒／連隊と地域社会の距離／人生道場としての軍隊

2　戦時下の兵士 ―― 74

中国戦線のある輜重兵連隊／盛大な送別会／地に墜ちた軍紀／機能しない階級制度／兵たちの体力低下／私的制裁の黙認／必要悪／古兵の自慢話／力の強弱という論理／「度胸がねえ大隊長だナ」／「己の可愛いい子分」／社会に立脚する軍隊

3　少年兵たちの軍隊 ―― 94

大量の少年を迎え入れた理由／学力で選別される少年たち／陸海軍の採用試験問題／「貧しさ」から脱却する早道／甘言／「無茶苦茶な制度」／特攻要員へ／「臆病」はタブー／崩壊した矜持／人はなぜ戦場へ行ったのか

第三章　兵士と家族――戦争の「不公平」 ―― 115

1　「手当」をめぐる不公平 ―― 116

扶助への偏見／援護をうけられない中間層／月給を「保障」された人びと／大企業の応召者待遇――財閥系企業の場合／身分・在職期間による差別／官庁の応召者待遇／

羨望と怨嗟の的／農家・自営業者に対する対策／応召手当は経営の負担／大企業の「本音」／「社会的公正」の論理／「独立の者は関係がない」／ブルーカラー差別／強制力を持たない「案」／「已むを得ませぬ」——昇進の格差／長期戦が生んだ問題／多発する駆け込み入社／応召手当受給者・松本清張／公平・公正とは何か？

2 軍事郵便をめぐる不公平 ——— 153

手紙が来ない／慰問文の減少／注文をつける兵士たち／身の上相談／軍事郵便に記された残虐行為

3 戦死者墓石・戒名の不公平 ——— 162

墓石の〝規格化〟／「墓石競争」／まもるべき「分」／否定される平等化／戦時下戒名の実例

4 「食」をめぐる不公平 ——— 174

戦場の食／昭和一七年・内地兵営の食糧事情／統制経済の網／なのになぜ残飯が出るのか？／「公平」な分配が不公平を生む／「飯びつ」方式の現実／古年兵への遠慮／軍隊の〈人間観〉／内務班の精神的重圧／階級間の体格差／メレヨン島の「不公平」／「悪平等思想」／統制のゆるみ／将校の破廉恥行為

第四章　「戦死の伝えられ方」をめぐって　199
1　戦死の真相を探る　200
置いていかれた兵士／「戦死をめぐる体系」の崩壊／検閲回避のための暗号／文字通りの断絶／現地の部隊からの手紙／虚像／「銃剣突撃による死」という描き方／「兎に角、遺族の気持ちになれ」／丁重な扱い／遺骨の護送／戦死者遺族の感情を重視／抽象的な「死」へ／「公」的な仕組みの崩壊／肉親の最期を探る／「おめえはよかったな」——メレヨン島兵士のその後／紙一枚の状況報告／戦死日のつじつまが合わない
2　引揚援護庁『死亡認定の参考』をめぐって　236
死亡認定マニュアル／敗戦国日本の実情／能率よい消化／困難な聞き取り調査／調査者の「主観」／死亡認定を受けられない人たち／機械的な決め方／あきらめきれない家族／死亡時刻の「特例」／留守宅の意向／公権力としての体面／死亡事実を認めない遺族たち／敗北の悲惨／宙に浮いてしまった人びと
おわりに　269

参考文献 277
あとがき 273

凡例

・本書で引用した原史料は、読者の読みやすさを考慮して句読点を補い、漢字カナ交じり文はかな交じり文に、旧漢字・旧仮名遣いは現在のものにあらためるなど、一定の変更を加えた。また、引用文中の傍点はすべて引用者（一ノ瀬）による。

・文中、敬称はすべて略した。

・引用史料中には、現在では差別・偏見ととられる不適切な表記があるが、歴史的史料という性格のため、原文のままとした。